

親鸞研究—悪と救い

A Study of Shinran: Evil and Salvation

宇野正三

Shozo Uno

悪人正機

「悪人正機」と言えば、直ちに親鸞が連想されるほど、この説は周知されている。すなわち、親鸞の弟子の唯円が師の教えを聞き書きした『歎異抄』に次のように説かれている。「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいわく、悪人なお往生す。いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀（阿弥陀仏の略称）の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にてても生死をはなるることあるべからざるを、あわれみたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。」（『歎異抄』、宗祖篇上、1,055 頁）とある。併し、親鸞の師の法然上人は口伝とはいえ、「善人尚もて往生す、況や悪人をや。」¹と語っている。法然上人は「弥陀の本願は専ら罪人の為なれば、罪人は罪人ながら名号を唱えて往生す、是れ本願の不思議なり。」²と語り、また、「室の津の遊女に示されける御詞」には「弥陀如来、汝がごときの罪人の為に、弘誓をたて給える。」³とある。親鸞は、「弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。」（『歎異抄』、宗祖篇上、1,053 頁）と語り、また、「凡夫はもとより煩惱具足したるゆえに、わるきものとおもうべし。」（『親鸞聖人真筆消息』、宗祖篇上、744 頁）とも言っている。

法然上人が「偏に善導一師に依る」と、師と仰いだ中国の善導大師は、法の深信、機の深信について次のように説いている。「深信と言うは、即ち是れ深信の心なり。亦二種有り。一には決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた（遙かな昔から）、常に没し（迷界に沈淪し）常に流転して、出離（迷妄の生存から解脱すること）の縁有ること無しと信ず（機の深信）。二には、決定して深く、彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受したまうこと（受け入れてくださること）、疑い無く、慮り無く（思案せずに）、彼の願力に乗じて、定んで往生を得と信ず（法の深信）。」⁴すなわち、弥陀の本願の機（対象）は悪人なのである。

悪人は悪いことをする人を意味するが、親鸞の場合は、特に自力では悟れない人のことで

ある。親鸞は9歳で出家し、比叡山^{ひえいざん}で修行したが、自力による菩提^{ぼだい}（悟り）の成就に絶望した結果、29歳で下山し、選修念仏^{せんじゆ}を唱道する法然上人^{ほうねんしょうにん}に帰依した。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然上人）のおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細^{しさい}（わけ）なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業^{ごう}にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然聖人^{しょうにん}にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身^みが、念仏をもうして地獄におちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ。いずれの行^{ぎょう}もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし（地獄以外に行くところが無い）」（『歎異抄』、宗祖篇上、1,054頁）と、法然上人の他力念仏の教えに絶対随順している。

悪には、道徳的悪、法律的悪、宗教的悪がある。これらの悪を犯せば、何らかの償いが求められる。仏教で業とは、行為とそれが心に残す習慣性（習気^{じゅうけ}）を意味する。習気は宿業^{しゆくごう}とも謂う。特に良くない習気無くさない、悪行^{あくぎょう}を繰り返すことになる。暴力の習気のある人は、腹立たしい状況に陥ると、激しい暴力を振るってしまう。正に、親鸞は「さるべき業縁^{ごう縁}のもよおさば、いかなるふるまいもすべし」（『歎異抄』、宗祖篇上、1,065頁）と断言している。

自己を悪人であると深省^{しんせい}していた親鸞は、「弥陀の五劫思惟^{ごこうしゆい}の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人^{いちにん}がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懐そうらいし。」（『歎異抄』、宗祖篇上、1,074頁）と語り、弥陀の本願は、自分のような業の深い人間のためにあるのだと、深謝の念を吐露^{とろ}している。さて、悪業^{あくごう}（良くない習気）を無くする方法は無いのであろうか。救いの道は有るのか。阿弥陀仏は、罪惡深重の我々を救うために四十八願を立てた。その十八願には次のように誓われている。「たとい、われ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂^{しんぎょう}（信心）して、我が国に生まれんと欲^{おほ}いて、乃至十念せん。若し生まれずんば正覺^{しょうぎやく}を取らじ。唯、五逆^{ごぎやく}（一般的な説では、母を殺す、父を殺す、阿羅漢を殺す、仏身を傷つけ出血させる、僧の和合を破壊分裂させる、これらの五つの最も重い罪業を謂う。）と正法^{しょうぼう}（仏法）を誹謗するものを除かん。」（念仏往生の願）⁵信樂について、親鸞は次のように説明している。「＜信樂＞というは、如来の本願真実にましますを、ふたごころろなくふかく信じてうたがわざれば、信樂ともうすなり。」（『尊号真像銘文^{めいもん}』、宗祖篇上、604頁）

念仏とは、南無阿弥陀仏（南無とは帰命の意味で、全身全霊で帰依すること）と称える^{しょうみょう}称名^{しょうめい}のことである。「＜十念＞というは、ただくちに十返^{じゅうへん}をとなうべしとなり。しかれば、^{せんじやくほんがん}選択本願には、『若我成仏^{じやうがつ}、十方衆生^{じっぽうしゅうじやう}、称我名号^{しょうがみごう}下至十声^{しやうしやう}、若不生者不取正覺^{にやくふしょうじやくしやくしょうがく}（若し、われ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること、下、十声に至るまで、若し生まれずんば正覺を取らじ）』ともうすは、弥陀の本願は、とこえまでの衆生みな往生すとしらせんとおぼして十声とのたまえるなり。念と声^{しやう}とはひとつこころなりとしるべしとなり。念をはなれたる^{しやう}声なし、声をはなれたる念なしとなり。」（『唯信鈔文意』、宗祖篇上、715-

716 頁) 親鸞は、念＝信心と声＝称名とは一体であると考えている。

『観無量寿経』は説く。「下品下生の者とは、或は衆生有りて、不善業たる五逆・十悪を作りて、諸の不善を具す。此くの如きの愚人、悪業を以ての故に、応に悪道に墮し、多劫を経歴して、苦を受くること窮まり無かるべし。此くの如き愚人、命終わる時に臨みて、善知識（仏法について見識を持っている人）の、種々に安慰して（心安らかにさせ）、為に妙法を説き、教えて、念仏せしむるに遇わん。此の人、苦に逼られて、念仏するに違あらず。善友（ここで説諭している善知識）告げて言わく、『汝、若し念ずること能わざれば、応に無量寿仏と称うべし』と。是の如く、至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称えしむ。仏の名を称うるが故に、念念の中に於いて、八十億劫の生死の罪を除き、命終わる時、金蓮華（金色の蓮華）の、猶、日輪の如くにして、その人の前に住するを見ん。一念の頃の如きに、即ち極楽世界に往生することを得。蓮華の中に於いて、十二大劫を満じて、蓮華方に開く。観世音・大勢至、大悲の音声を以て、其れが為に、広く諸法実相と罪を除滅する法を説きたまう。聞き已わりて歡喜して、時に応じて即ち菩提の心を発す。是れを下品下生の者と名づく。」⁶

第十八願では、「五逆と正法を誹謗する者を除かん」とあって、このような人は極楽往生から排除されている。『観無量寿経』では、五逆を犯した者が、念仏によって往生できるとされている。両経の齟齬について、善導大師は次のように解釈している。「問いて曰く。四十八願の中の如きは、唯、五逆と誹謗正法とを除きて、往生を得しめず。今此の『観経』の下品下生の中には、謗法を簡びて（排斥して）五逆を撰せるは何の意か有るや。答えて曰く。此の義仰ぎて抑止門の中に就きて解す。四十八願の中の如き、謗法・五逆を除くことは、然るに此の二業、其の障り極重なり。衆生若し造れば、直ちに阿鼻に入りて、歴劫周障して（極めて長い間苦しんで）、出づべきに由（方法）無し。但、如来其れ斯の二つの過を造らんことを恐れて、方便して、止めて往生を得ずと言えり。亦、是れ撰せざるに非ざるなり（納め取ってくれないのではない）。又下品下生の中に、五逆を取りて謗法を除くことは、其れ、五逆は已に作り（『観無量寿経』などに拠ると、釈尊在世時代に、マガダ国の阿闍世王は父を殺害し、五逆罪の一つを犯した。）、捨てて流転せしむべからず（放置して迷妄の生存に流転させるべきではない）。還りて大悲を発こし、撰取して往生せしむ。然るに謗法の罪は未だ為らざれば、又止めて若し謗法を起こさば、即ち生ずることを得じと言ふ。此れは未造業（未だ謗法は犯していない）に就きて解するなり（如来は謗法を抑止する意図で説かれたのであろう）。若し造らば、還りて撰して生ずることを得しめん。彼に生ずることを得と雖も、華合して（蓮華の華の中に閉じ込められて）多劫を遷ん。此れ等の罪人華の内に在る時、三種の障り有り。一には、仏及び諸の聖衆を見ることを得じ、二には、正法を聴聞することを得じ、三には、歴事供養（様々な仏国土を訪れて、諸仏や菩薩を供養すること）を得じ。此れを除きて已外は更に諸の苦無し。経に云わく、『猶、比丘の三禪の楽（色界の第三禪天で享受する楽しみ）に入るが如きなり』と。応に知るべし、華の中に在りて、多劫開けずと雖も、阿鼻地獄の中にして、長時永劫に諸の苦痛を受けんに勝れざるべ

けんや。此の義、抑止門に就きて解し^ト覺^{おほ}わんぬ、と。」⁷この箇所を親鸞は『教行信証』に引用しており、その説に同調している。ここには抑止門と摂取門が説かれている。『無量寿経』に「五逆と謗法を除く」とあるのは、仏の真意は、罪業の為に仏縁から遠ざかり、悟道が困難になることを憂慮して、悪を起こさないように警告しているもので、悪を為しても、念仏に依って赦^{ゆる}され、悟りに至り得るとの趣旨であると善導は解釈する。「弥陀の本願をさまざまぐるほどの悪なきゆえに。」(『歎異抄』、宗祖篇上、1,053 頁)

阿弥陀如来の本願を信じて念仏すれば悪業が消滅していくのである。その過程において、阿弥陀如来への気付き＝悟りも生じ得る。それが浄土への往生である。この悟りは回心^{えしん}とも言われる。「仏願力を以て、五逆と十悪と罪滅し、(浄土に) 生ることを得しむ。謗法、闡提^{せんたい}(極悪人で、悟りことが出来ないと考えられていた人)、回心すれば皆(浄土に) 往く。」⁸『般舟三昧経』に依る。慈愍和尚^{じみんかしやう} 『(阿弥陀仏の) 名を称すれば(念仏すれば) 罪消滅する』(『教行信証』、宗祖篇上、39 頁)「もとのところをひきかえて(弥陀の他力を知らず、迷界に彷徨^{ほうこう}する自心を転回して)、本願をたのみまいらすをこそ、廻心^{えしん}とはもうしそうらえ。」(『歎異抄』、宗祖篇上、1,069 頁)

親鸞は本願を憑^{たの}む心で念仏すれば、如何なる悪人も浄土への往生^{かな}が叶い、安楽な境涯に入れると説く。

自力と他力

親鸞は二種廻向^{えこう}について次のように述べている。「謹んで浄土真宗を按ずるに(考えると) 二種の廻向有り。一には往相^{おうそう}、二には還相^{げんそう}なり。往相の廻向に就きて真実の教信証有り。」(『教行信証』、宗祖篇上、9 頁) 二種廻向について、親鸞が傾倒した中国の曇鸞^{どんらん}大師は次のように説いている。「廻向に二種の相有り。一は往相、二は還相なり。往相とは、己^{おの}が功德(自分の善い行いの恵み)を以て一切衆生に廻施^{えせ}して(回らし与えて)、作願^{きがん}して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せんとなり。還相とは、彼の土に生まれ已^{おほ}りて、舍摩他^{しやまた}(止一心を寂^{じやくじよう}静に保ち、対象に集中すること)毘婆沙那^{びばしやな}(観一智慧によって対象を観ずること)方便力^{ほうべんりき}(悟りに導く様々な手立てを施^{ほどこ}す力)成就することを得て、生死^{ちゆうりん}の稠林^{えにゆう}に廻入し(迷いの密林に入って)、一切の衆生を教化して、共に仏道に向かうなり。若しは往若しは還、皆、衆生を抜きて(衆生を苦界から脱せしめ)、生死海を渡さんがためなり。是の故に(その為、インドの天親菩薩^{てんじん}は『浄土論』で、)『廻向^{しゆ}を首(根本)として大悲心を成就することを得るが故に。』と^{のたま}えり。」⁹この教えに親鸞は立脚しているが、往相廻向の「己が功德を以て一切衆生に廻施して、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せんとなり。」の箇所を「己が功德を以て一切衆生に廻施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまうなり。」、また、還相廻向の「共に仏道に向かうなり。」の文章を「共に仏道に向かえしめたまうなり。」と読み替え、我々の廻向の根本に阿弥陀如来の働きが有るとしている。

弥陀の他力廻向は本願力ということが出来る。「他力と言うは、如来の本願力なり。」(『教

行信証』、宗祖篇上、51 頁) 本願力は弥陀が我々を引き付ける力であり、悟りへと向かわしめ、煩惱から解脱させる働きであり、救済力である。浄土門は弥陀の他力に信順することを宗旨としているが、親鸞は歴代の祖師方よりも本願他力の働きを強調している。この教説は、カルヴァンの予定説のように、阿弥陀仏が悟る人と悟れない人を^{あらかじめ} 予め決定していると取られるべきではない。悟りの可否や悟りの速さの相違は、我々の向上の障りとなる業=習気に起因している。

弥陀の他力は全世界を覆っており、我々は弥陀に^{せつしゆ} 攝取されている(救済力の中に在る)。この本願力に乗じることに依って、自力の努力によるよりもより容易に悟ることが出来る。浄土門は考える。「弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 攝取不捨の利益(我々を決して捨てない弥陀の本願力に包まれている御蔭)にて 無上覚(無上等正覚)をばさるなり。」(『正像末和讃』、宗祖篇上、468 頁)

本願力を仰ぐ受容的心構えで南無阿弥陀仏と称える^{ぎとう} 行が他力の念仏である。我々は仏である釈尊の説を信じて念仏をすれば、本願力の御蔭で悪業=悪い習気が消滅して行って、阿弥陀仏を自覚する悟りに至り得る。かくして、罪悪感に苦しむことも無くなり、救いが成就するのである。悟ってからも念仏生活の中で、悪業=悪い習気が次第に断滅し、究極的には仏果に達し得る。親鸞は弥陀の他力に^{えびよう} 依憑することを高調するが、決して自力修行の^{しょうどうもん} 聖道門を否定しているのではない。ただ、「たとい自余の教法すぐれたりとも、みずからがためには器量およばざれば、つとめがたし」(『歎異抄』、宗祖篇上、1,062 頁) と率直に語っている。

親鸞の信仰の深化の道程を示す三願転入について、『教行信証』^{ほうべんけしんじ} 方便化身土の巻で次のように述べている。「是れを以て愚^ぐ 禿^{とく} 釈^{しやく} の鸞(愚禿とは越後流罪後の親鸞の自称)、^{ろんじゆ} 論主(天親菩薩)の^{げぎ} 解義(解釈)を仰ぎ、宗師(善導大師)の^{かんげ} 勧化(教え)に依りて、久しく^{まんぎやう} 万行諸善の^{けもん} 仮門(弥陀の第十九願に依拠して、菩提心[悟りを求める心]を持って、様々な自力の^{ぜんぎやう} 善行を實踐することに依り往生を目指す要門)を出でて、永く^{そうじゆりんげ} 双樹林下の往生(要門の往生で、真の浄土ではない化身土に生まれること)を離る。^{ぜんぽんとくほん} 善本徳本(自力念仏)の真門に^{えにゆう} 回入して(弥陀の第二十願に基づき、自力の念仏に依って往生を目的とする真門に入り)、^{ひとえ} 偏に難思往生(真門の往生で、化身土に生まれること)の心を^{しん} 発こしき。然るに、今まことに方便の真門を出でて、^{せんじやく} 選択の願海(弥陀の第十八願で、他力念仏者の浄土往生を誓う^{ぐがん} 弘願)に転入せり。速やかに難思往生の心を離れて、^{なんじぎ} 難思議往生(真の浄土=真仏土への不可思議な往生)を遂げんと欲う。果遂の誓い(念仏者を必ず浄土に往生させるとの弥陀の誓い)、^{まこと ゆえ} 良に由有るかな(弥陀の御配慮が納得させられる)。ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。」(『教行信証』、宗祖篇上、210 頁)

弥陀の本願の第十九願と第二十願は次のとおりである。第十九願―「たとい、われ仏となるを得たらんに、十方の衆生、菩提心を発こし、諸の功德を修め、至心に願を^お 発こして、我が国に生まれんと欲わんに、^{いのち} 寿の終わる時に臨みて、^{もし} 仮令、大衆とともに^{だいいしゆ} 圍繞して(聖衆に取り囲まれて)、其の人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。」¹⁰第二十願―「たとい、われ

仏となるを得たらんに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係け、諸の徳本（仏道の進展を生じる善行。これを親鸞は自力の念仏と解した。）を植え（積み）、至心に廻向して、我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば（その目的が実現しなかったならば）、正覚を取らじ。」¹¹

親鸞は、自力聖道門の修行から、自力念仏の立場に転じたが、証悟に至れず、限界に撞き、遂に法然上人の唱導する他力念仏の浄土門に到達した。

仏智を疑って弥陀の本願を信じず、自力修行に邁進するとどうなるのであろうか。『無量寿経』は次のように説いている。「疑惑し（仏智を疑惑して、仏の説かれる本願の真实性を信じず）中悔して（途中で修行を悔いて、放棄し）、自ら過咎（過ち）を為して、彼の辺地（浄土の中の辺鄙な所、仮の浄土）の七宝の宮殿に生まれ、（その宮殿に閉じ込められて）五百歳の中に（500年間）諸の厄（仏を見れないなどの仏縁を閉ざされた災厄）を受くるを得ること無かれ。」¹²「若し、衆生有りて、疑惑の心を以て諸の功德を修めて（種々の善行を修めて）、彼の国に生まれんと願わんに、仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了らずして、此の諸の智に於いて疑惑して信ぜず。然れども猶、罪福（罪惡を犯せば惡報があり、福＝善行を為せば善報があること）を信じ、善本を修習して（善行に励んで）、その国に生まれんと願う。此の諸の衆生、彼の宮殿に生まれ、寿五百歳、常に仏を見たてまつらず、経法を聞きたてまつらず、菩薩・声聞の聖聚を見たてまつらざらん。是の故に、彼の国土に於いて、これを胎生（化身土に生まれて、胎児が胎内に在るように、宮殿や蓮華の華の中に閉じ込められていて、仏法に出会えないこと）と謂う。若し、衆生有りて、明らかに仏智乃至勝智を信じて、諸の功德を作し、信心廻向せば、此の諸の衆生、七宝の華の中に於いて、自然に化生し（真の浄土に生まれて、何物にも閉ざされることなく、三宝〔仏・法・僧〕も見聞できる）、跏趺（結跏趺坐）して坐せん。須臾の頃に、身相、光明、智慧、功德、諸の菩薩の如く、具足し成就せん。」¹³「その胎生の者は、皆、智慧無ければ、五百歳の中に於いて、常に仏を見たてまつらず、経法を聞きたてまつらず、菩薩・諸の声聞衆を見たてまつらず、仏を供養するに由無く、菩薩の法式（作法）を知らず、功德を修習することを得ず（善根＝善を生じる根本を身につけることが出来ない）。当に知るべし、此の人、宿世（仮の浄土に往く前の世）の時、智慧有ること無くして、疑惑せしが致す所なり。」¹⁴「此の諸の衆生も、（中略）仏智を疑惑せしを以ての故に、彼の宮殿に生まれて、（中略）但、五百歳の中に於いて三宝を見たてまつらず、供養して諸の善本（善根に同じ）を修することを得ず。（中略）若し此の衆生、其の本罪（仏智に疑心を抱いた罪）を識り、深く自ら悔責して、彼の処を離れんことを求むれば、即ち意の如く、無量寿仏の所に往詣して、恭敬し供養することを得ん。亦、遍く無量無数の諸仏の所に至りて、諸の功德を修することを得ん（多くの善根を修めることが出来るであろう）。」¹⁵釈尊は、このように説いて、仏智を疑い、本願を信じないことに警鐘を発しながらも、化身土で仏縁を絶たれた身を悔いて、真の浄土を目途として精進する者に救いへの道を開いているのである。

親鸞は、他力往生の立場に立たない者は仏智を疑っていると見ているのである。故に、親

鸞は、自力往生の立場に立っていると見る第十九願と第二十願は仏智を疑う立場だと考える。法然上人が「浄土三部経」と名付けた『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』は何れも阿弥陀仏の本願を説いている。これは釈尊が説いているので、仏智を疑うとは、釈尊の説法内容の真理性を疑うことで、その結果、弥陀の本願を信じられないこととなる。故に、弥陀の他力に憑^{たよ}って悟る道は閉ざされるのである。自己の念仏の力で悟りを目指すのは自力の念仏である。この行法では、仏道の進展が緩慢になると親鸞は考える。「信心かけたる行者は、本願をうたがうによりて、辺地^{へんじ}（化身土である仮の浄土）に生じて、うたがいのつみをつぐのいてのち、報土（真の浄土）のさとりをひらくところぞ、うけたまわりそうらえ^{うかが}（伺っています）。」（『歎異抄』、宗祖篇上、1,071 頁）

真仏土と化身土

真仏土と化身土は、どう違うのであろうか。親鸞の説明を見てみよう。「謹んで真仏土を按ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり。土は亦是れ無量光明土なり。然れば則ち大悲の誓願^{しゅげん}に酬^{しゅう}報するが故に（慈悲心から発こした誓願が報われて成立した世界であるので）真の報仏土^{ほうぶつど}と曰^いうなり。既にして願います（願が発こされている）、即ち光明・寿命の願是れなり。『大経』^{だいけい}（『無量寿経』）に言わく、（第十二願）『たとい、われ仏を得たらんに、光明能く限量有りて、下、百千億那由他の諸仏の国を照らさらざるに至らば正覚を取らじ』と。又願に言わく、（第十三願）『たとい、われ仏を得たらんに、寿命能く限量有りて、下、百千億那由他劫に至らば正覚を取らじ』と。」（『教行信証』、宗祖篇上、155 頁）

「謹んで、化身土を顕^{あら}わさば、仏は『無量寿仏観経』^{むりやうじゅぶつかんぎやう}（『観無量寿経』）の説の如し。真身^{しんしん}観仏^{かんぶつ}は是れなり。土は『観経』^{かんけい}（『観無量寿経』）浄土は是れなり。復^{また}『菩薩処胎経』^{ぼさつしよたいきやう}等の説の如し、即ち懈怠界^{けいけんがい}は是れなり。亦、『大無量寿経』の説の如し、即ち疑城胎宮^{ぎじやうたいぐ}は是れなり。」（『教行信証』、宗祖篇上、183 頁。）懈怠界とは、仮の浄土で、快楽に満ち、その衆生は怠慢に墮し、真の浄土に生まれる願いが殆ど無い。疑城胎宮も仮の浄土で、閉じ込められて、三宝から遮断される世界。

阿弥陀仏の阿弥陀とは梵語の **amita** の音写で、無量（無限）の意味であり、阿弥陀仏は無限の存在者のことである。弥陀は無量であるから世界に唯一の存在で、無量光仏（梵語 **Amitābha**）とか無量寿仏（梵語 **Amitāyus**）とも称される。極楽＝浄土は阿弥陀仏の誓願に基づいて実現した世界であるので、報土と称され、これは真仏土である。化身土は、仮の浄土で、釈尊の仏智を疑って、釈尊が説いた弥陀の本願の真理性が信じられずに仏道修行を行っている人が陥る世界で、500 年間仏法が聞けないなど仏縁^{おんり}から遠離され、悟りを得るのに多くの時間を要する。

弥陀の本願は、弥陀が衆生を弥陀自身^{けんじん}に牽引する力（救済力）^{もたら}が齎^{もたら}す恩恵を、釈尊が例えば四十八願の内容で示したもので、それらの願を信じて修行すれば各誓願が立てた目的が実現するとされる。特に第十八願は念仏に依って浄土への往生が可能となる、とされる。この願は、浄土門で四十八願の中の眼目とされ、善導大師は次のように言っている。「一心^{いっしん}

に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近（時間的長短）を問わず、念念に（絶えず）捨てざるは、是れを正定の業（浄土に往生するための弥陀に依って正しく定められた行）と名づく。彼の仏願に順ずる（弥陀の第十八願に従う）が故なり。」¹⁶親鸞は、「名を称するに能く衆生の一切の無明を破し（迷界で生死する淵源で、弥陀に気付いていない根本的無知を無くし）、能く衆生の一切の志願を満てたまう。称名は則ち是れ最勝真妙の正業なり。正業は則ち是れ念仏なり。念仏は則ち是れ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏即ち是れ正念（他力の信心に基づく行）なり。」（『教行信証』、宗祖篇上、19頁）と言っている。また、「弥陀大悲の誓願をふかく信ぜんひとみなねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏となうべし。」（『正像末和讃』、宗祖篇上、495頁）と詠んでいる。

真仏土に往生することが、極楽浄土に生まれることである。その事情を『無量寿経』に見てみよう。「仏、阿難に告げたもう、『其れ、衆生有りて、彼の国に生まるる者は、皆、悉く正定の聚（集まり）に住す（成仏が定まっている）。所以はいかん。彼の仏国の中には、諸の邪聚（成仏が定まっていない衆生）と及び不定聚（成仏するかどうか定まっていない衆生）無ければなり。十方恒沙の諸仏・如来、皆共に無量寿仏の威神功德の不思議なることを讃嘆したもう。諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歓喜し、乃至一念せん。至心に廻向して、彼の国に生まれんと願わば、即ち、往生することを得て、不退転に住すればなり。唯、五逆と正法を誹謗する者とを除く。』仏、阿難に告げたもう、『十方世界の諸天・人民にして、其れ、至心に彼の国に生まれんと願う者有らんに、凡そ三輩有り。其の上輩の者というは、家を捨て、欲を棄てて、沙門（出家の人）と作り、菩提心を発こして、一向に専ら無量寿仏を念じ、諸の功德を修して、彼の国に生まれんと願う。此れ等の衆生、寿終わらん時に臨みて、無量寿仏、諸の大衆と与に、其の人の前に現じたまわん。即ち、彼の仏に随いて、其の国に往生し、便ち七宝の華の中に於いて、自然に化生す（母胎や卵殻などからでなく、忽然と自分で生まれる）。不退転に住し、智慧勇猛にして、神通自在ならん。是の故に、阿難よ、其れ、衆生有りて、今世に於いて、無量寿仏を見立てまつらんと欲せば、応に無上菩提の心を発こし、功德を修行して、彼の国に生まれんと願うべし。』仏、阿難に語りたもう、『其の中の中輩の者というは、十方世界の諸天・人民にして、其れ至心に彼の国に生まれんと願う者有らんに、行じて沙門と作り、大いに功德を修すること能わずと雖も、当に無上菩提の心を発こして、一向に専ら無量寿仏を念ずべし。多少、善を修し、齋戒（八齋戒—在家仏教信者が月に六日の六斎日に一日一夜に限り守る戒①生き物を殺さない②盗みをしない③嘘をつかない④お酒を飲まない⑤性行為をしない⑥正午以後は食事をしない⑦装身具を付けず、香油を塗らない⑧高く広い寝台で寝ない）を奉持し（守り）、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繪（絹の天蓋）を懸け、燈を然し、華を散じ、香を焼き、此れを以て廻向して、彼の国に生まれんと願う。其の人終わりに臨みて、無量寿仏、其の身を化現したまい（形を成されて）、光明・相好（勝れた身体的特徴）、具に真仏の如く、諸の大衆と与に、其の人の前に現じたまわん。即ち、化仏に随いて、其の国に往生し、不退転に住せん。功德・智慧、次いで上輩の者の如くならん。』仏、阿難に語りたもう、『其の下輩の者というは、十

方世界の諸天・人民にして、其れ至心に彼の国に生まれんと欲う者有らんに、仮使、諸の功德を作ること能わずとも、当に無上菩提の心を発こして、一向に意を専らにして、乃至十念に無量寿仏を念じて、其の国に生まれんと願うべし。若し深法（弥陀の本願）を聞き、歡喜信樂して、疑惑を生ぜず、乃至一念に、彼の仏を念じて、至誠心を以て、其の国に生まれんと願わば、此の人終わりに臨んで、夢の如くに彼の仏を見立てまつりて、亦往生を得ん。功德・智慧、次いで中輩の者の如くならん。』¹⁷

この經文には、臨終時に御来迎は有るものの、浄土への往生は、死後のことと説かれている。併し、真実は、阿弥陀仏は無限の存在であるので、我々を含め、森羅万象が阿弥陀仏に包まれている。現世も来世も弥陀の中に在るのである。この弥陀に気付くこと＝悟りに依って、この世が浄土に変わる。親鸞の言う通り、真仏土の仏は阿弥陀仏で、土は極楽浄土であり、仏と極楽浄土は真仏土を弥陀の面と土の面から見た両面なのである。勿論、悟りに依って、浄土が現れるのは悟りを開いた人に対してのみである。万人にとっての客観的な現世は穢土のままである。「煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば すなわち穢身（煩惱充滿の身）をすてはてて 法性常樂証せしむ（真如に到達して、渝わりない安樂が得られる）。」（『高僧和讃』、宗祖篇上、441 頁）「弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 摂取不捨の利益にて 無上覺をばさとりなり。」（『正像末和讃』、宗祖篇上、468 頁）

浄土＝真仏土には、正定聚の衆生しかいないと説かれている。正定聚の位は、成仏が決まっている衆生である。我々は悟りに依って心の眼が開かれる。心眼は一度開かれると閉じることはない。故に、我々は二度と迷妄の生存には退行しないので、正定聚の位は、不退転の位と言われるのである。「仏願力に縁るが故に、正定聚に住せん。正定聚に住せるが故に、必ず滅度（悟り）に至らん。」（『教行信証』、宗祖篇上、53 頁）

真仏土＝阿弥陀仏と化身土との根本的な相違は前者が形の無い世界で、後者が有形の世界だということである。「無上仏（阿弥陀仏）ともうすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆえに、自然とはもうすなり。かたちもましますとしめすときは、無上涅槃とはもうさず。」（『正像末和讃』、宗祖篇上、530 頁）

親鸞は信心に依って浄土に往生すると説くが、信心が決定するには、阿弥陀仏の存在への確信を要する。信心決定は、断じて盲目的な信仰ではないのである。それは悟りを含むのである。『成等覺証大涅槃』（弥勒に等しい悟りを成就して、安樂の境界を得る）というは、『成等覺』というは正定聚のくらいなり。（『尊号真像銘文』、宗祖篇上、650 頁）信心決定に依って、我々は正定聚の位に住するが、その位は将来の成仏が決まっているだけで、直ちに現世で成仏するということではない。その後も、我々は念仏に挺身して、宿業を滅して行って、仏果を目指さなければならないのである。その成就是、来世を待たねばならないかも知れない。現生（現世）で浄土への往生は可能であるが、仏に成るには、なお念仏修行を要するのである。親鸞の教説は、仏道の達成に阿弥陀仏の本願力をいただく他力の念仏以外に捷徑は無いとするものである。「大悲の願船（阿弥陀仏の本願力）に乗じて光明の広海に浮かびぬれば（極楽浄土に往生すれば）、至徳の風静かに、衆禍（多くの禍）の波転

ず。即ち、無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す（心安らかな涅槃の境界に到る）。」（『教行信証』、宗祖篇上、50 頁）「真実信心をえんとき、摂取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらいにさだまるとみえたり。」（『尊号真像銘文』、宗祖篇上、605 頁）「〈不退〉というは、仏にかならずなるべきみとさだまるくらいなり。」（『尊号真像銘文』、宗祖篇上、607 頁）

浄土に往生すれば、心に安心の境界＝涅槃が得られる。「極楽は無為涅槃の界なり。」¹⁸
『願海にいりぬるによりてかならず大涅槃にいたるを、法性のみやこ（真如＝真の浄土＝阿弥陀仏）へかえるともうすなり。（中略）これを、真如実相を証すともうす、無為法身ともいう、滅度にいたるともいう、法性の常樂を証すともうすなり。（中略）選択不思議の本願、無上智慧の尊号をききて、一念もうたがうころなきを真実信心というなり。金剛心（不壞の信心）ともなづく。この信樂をうるときかならず摂取してすてたまわざれば、すなわち正定聚のくらいにさだまるなり。このゆえに信心やぶれず、かたぶかず、みだれぬこと金剛のごとくなるがゆえに、金剛の信心とはもうすなり。（中略）『大經（無量壽經）』には、『願生彼国、即得往生、住不退転』のたまえり。『願生彼国』は、かのくにうまれんとねがえとなり。『即得往生』は、信心をうればすなわち往生すという。すなわち往生すというは不退転に住するをいう。不退転に住すというはすなわち正定聚のくらいにさだまるとのたまう御のり（御教え）なり。これを即得往生とはもうすなり。〈即〉はすなわちという。すなわちというは、ときをへず、日をへだてぬをいうなり。』（『唯信鈔文意』、宗祖篇上、688-691 頁）「真実信心の行人は、摂取不捨のゆえに、正定聚のくらいに、信心のさだまるとき住す。このゆえに臨終をまつことなし、来迎をたのむことなし。信心のさだまるときに往生はさだまるなり。」（『古写消息』、宗祖篇上、768 頁）「現生に（この世で）正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。」（『浄土三經往生文類』、宗祖篇上、577 頁）
念仏に依って現生で悟りを得られることは、真宗七祖の初祖であるインドの竜樹菩薩も述べている。「阿弥陀仏の本願は是の如し。若し人我を念じて名を称し、自ら帰せば即ち必定に入り（成仏が定まっている位＝正定聚の位＝不退転の位に入り）、阿耨多羅三藐三菩提（無上正等覺）を得んと。是の故に常に心に憶念すべし（弥陀の本願への思いを保持すべきである）。」¹⁹

結び

浄土に往生すれば、安樂な涅槃の境地に入り、永続的な幸せを獲得する。釈尊は故郷に帰った時に、一子ラーフラを出家させ、自らの弟子とした。釈尊は、実子が釈迦族の王という世俗的な榮華よりも、涅槃の境地を得ることに大きな価値を置いたのである。出家、在家に拘わらず、念仏すれば、好ましくない習気は消滅して行き、弥陀への気付きに因って、現生で涅槃の道が開かれ得るのである。罪惡を犯せば、その記憶が消えるわけではない。併し、涅槃の境界に達することに依って、罪惡感から苦悩することは無くなる。これは我々にとって、救済となるであろう。多くの人々が浄土の住人となれば、有形の世界そのものが極樂に

なっていくであろう。

註

・親鸞の著作からの引用は、教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』（本願寺出版社、2012）を使用し、引用箇所は、本文中の引用文の後に、引用著作名の次に、宗祖篇上と略記し、頁数を示した。宗祖とは親鸞を意味する。

・大正藏經とあるのは、大正新脩大藏經の略である。

・引用に当たり、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。また、无は、無に字体を変更した。

・論文中の漢字の振り仮名は筆者が付した。

・論文中の丸括弧内の説明は筆者が付した。

- 1 法然^{さんじんりょうけん}『三心料簡および御法語』、石井教道編 昭和新修法然上人全集、平楽寺書店、1979、454 頁
- 2 法然「甘糟太郎忠綱に示す御詞」、同全集、717 頁
- 3 法然^{むろ つ}『室の津の遊女に示されける御詞』、同全集、718 頁
- 4 善導^{かんぎょうしよ}『観經疏』、大正藏經、第 37 卷、271 頁上-中
- 5 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、268 頁上
- 6 『観無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、346 頁上
- 7 善導『観經疏』、大正藏經、第 37 卷、277 頁上-中
- 8 善導『法事讃』、大正藏經、第 47 卷、426 頁上
- 9 曇鸞『往生論註』、大正藏經、第 40 卷、836 頁上
- 10 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、268 頁上-中
- 11 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、268 頁中
- 12 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、275 頁下
- 13 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、278 頁上-中
- 14 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、278 頁中
- 15 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、278 頁中
- 16 善導『観經疏』、大正藏經、第 37 卷、272 頁中
- 17 『無量寿經』、大正藏經、第 12 卷、272 頁中-下
- 18 善導『法事讃』、大正藏經、第 47 卷、433 頁中
- 19 竜樹^{じゅうじゅうびやろん}『十住毘婆沙論』、大正藏經、第 26 卷、43 頁上

（広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター研究成果報告書『ぶらくしす』2017 年度 通巻第 19 号掲載論文）